The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『全体性と無限』における女性性について ： 『時間と他者』『実在から実存者へ』から
Author(s)	西田, 充穂
Citation	メタフュシカ. 2002, 33, p. 69-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『全体性と無限』における女性性について

――『時間と他者』『実存から実存者へ』から――

西田充穂

はじめに

「女性性 la féminité」とは『全体性と無限』（一九六一）[1]においてのみ展開される概念であり、それは家、エロス―繁殖性といった問題系とともに提起される。この女性性およびその問題系は、それ以降の著作では主題的に論じられなくなる、という事実からして特異な概念である。そのため、女性性は他者をめぐる議論とは別仕立てで設けられているようである。しかし、女性性を巡る議論は突如として『全体性』で表明されたのではなく、それに先立つ著書で予描されていたものである。それゆえ、女性性は他者論と不可分な関係を有していると考えられる。本論では『全体性』に先行する二著を参照し、女性性をめぐる議論の記述の錯綜を解明する。次いで『全体性』で詳述されるエロスにおける女性性について検討する。

一　『実存から実存者へ』――エロス―繁殖性の萌芽

その序文が「ここに提示する研究は予備的な性質を持つ」との一文で始まる『実存から実存者へ』（一九四七）[2]は、レヴィナス独自の思索を打ち出した初めての著書である。その「予備的性質」が単に『全体性』だけではなく、その前後の様々な論考へと向けられるものでもあることは、第二版（一九七七）、第三版（一九八一）に付された序文から明らかである。

しかしながら、『実存者』においては、『全体性』の女性性へ連なると考えられるエロスについての記述が少なく、トピックの羅列のような状態であり、言及されているのは以下

の二点のみである。非対称的な間主体性は多数性のカテゴリーではなく、エロスによって与えられること、エロスにおいてこそ、超越が根源的な仕方で思考され、存在に囚われ、不可避的に自己回帰する自我に別のなにものかをもたらしうるということ(EE.164)。

『全体性』の議論への萌芽は、世界の存在、対象との関係が反省以前の関係として記述される箇所にある。反省以前における存在者は、未だ主体の確立に達しておらず、実践と理論との区別はしない。そのような存在者の在り方は、自らの存在することを顧慮することでも、対象や世界へ向かう存在者の行為でもない。この在り方を存在者が対象に没頭する様として、レヴィナスは食べることに準える。

「存在するために食べる」、「生きるために食べる」といった動機や目的を有した行為以前のあり方について、食べられるものを「糧」と表現し、それをただ「食べる」こととして考察すること。これと『全体性』において、糧の「享受 jouissance/jouir de」として定式化された、事物や世界に対する「欲求 besoin」を介した関係についての記述とが相関を有していることを指摘しうる。もっとも、この時点では、糧への志向は「欲望 désir」と表記されている。欲望とは『全体性』では、他者との関係についての指標である。しかし、『実存者』での欲望による関係の特徴が「欲望とその充足との完全な一致」(EE.65)にある以上、それは術語が欲求へと置き換えられたとみなしてかまわないだろう。

注目すべきは、事物との関係を考察する際に、この「食べる」の対照項として「愛する」が挙げられている点にある。『全体性』において「食べる」とは他者ではなく、事物との関係の指標であり、「愛する」とは、女性性を検討する際に問題となる概念である。そして、『実存者』における「愛する」は、他人の存在する「対象なき次元」(EE.66)に存している。したがって、この「愛する」は、他者関係の考察への端緒であると考えられる。愛の特徴が「本質的で癒しがたい飢え」(*ibid.*)であるということ、そして、この愛の飢えと事物を求める飢えとが往々にして取り違えられるという記述から、レヴィナスが既に事物と他者への志向を別様に考えていたことが伺える。このような「愛する」の考察から、『全体性』において、事物への「欲求」に対比される他者への「欲望 désir」の要素を認めることができるだろう。

しかしながら、『実存者』における「愛する」をめぐる記述には、『全体性』での他者との関係ではなく、女性性との関係に限って適用される記述との重なりが見られる。「愛されるもの(l'être aimé)の前面で覚える混乱は、経済的な用語で所有と称されるものに先行して見い出されるだけでなく、所有そのものにおいても見い出される」(*ibid.*)といった一文

や、食べることの「模擬行為」として愛することを示す点は、『全体性』における女性性の記述が錯綜する要因となっているように思われる。[3]

二　『時間と他者』――「女性的なもの」の導入

『時間と他者』（一九四八）[4]は『全体性』への素描とされている。しかし、そればかりではなく、別の観点からも注目される。それは第二版（一九七九）に付された序文である。というのも、レヴィナスはそこで次の点を強調しているからである。すなわち、「超越する他性の概念」への探究が「諸々の差異に際立つ差異として、他のあらゆる質の差異とは異なる質としてだけでなく、差異の質そのもの」（TA.14）である女性性に基づくものであること。それゆえ、この序文は、レヴィナスが『全体性』以後に――『存在するとは別様に』（一九七四）[5]以後でもある――その議論の枠組みを再評価していると解されるのである。[6]

『時間と他者』は『実存者』での議論の筋道をほぼ踏襲している。『実存者』では、「倦怠」や「疲労」という切り口から存在への考察がなされるのであるが、これは『時間と他者』でのそれに比して自己完結的であるといえる。というのも、『時間と他者』での存在の考察は、存在者の外部への経路を獲得する傾向が見られるためである。そのための視座が、「孤独」であり、また、糧との関係を享受と定めることである。この糧との関係に、新たに「労働 le travail」が挿入されている。労働は、『全体性』では、他者への関係の一つであるのだが、ここでは未だそのような明確な位置付けはなされていない。積極的な仕方で他者との関係を見い出しうるのは、未来および他者の考察においてである。

さて、後者において、女性性の議論に連なると考えられる「女性的なもの le féminin」が導入されるのであるが、それは「絶対的に対立する対立者、絶対的に他なるものに留まる項を可能にする対立者」（TA.77）として見定められている。これは、『全体性』の他性に相当すると考えられる。というのも、『時間と他者』の時点では、他者の他性と女性性とは未だ分かたれておらず、女性的なものこそが「本質的に他なるもの」であり、「他者が本質として担う他性」をまさに担うものとして女性的なものが設定されているためである。この女性的なものの現われが光を前にして逃避し、自らを隠す「恥じらい la pudeur」や「慎み深さ la discrétion」と規定されること、女性的なものとの関係がエロスにおける「愛撫 la caresse」や「官能 la volupté」から考察されること。これらは『全体性』での女性性についての考察に継承されている。

また、女性的なものは『時間と他者』で言及される対面－対話関係とも深く関わっている。対面する二者は「私－きみ moi-toi」で表現されており、レヴィナスはこれが並列の関係ではないことを強調する。つまり、この対面-対話関係は、『全体性』において高低差を孕んだ関係として示される「私－あなた je-vous」に相当するだろう。ところで、「私－きみ」という表現は、『全体性』に到っては、もはや対面－対話関係についてではなく、女性性との関係に限定して用いられている。[7]『時間と他者』において、「媒介なき対面」が女性性との関係に与えられていること(TA.89)が、『全体性』との決定的な違いである。それゆえ、『時間と他者』では、女性的なものこそが他者関係を考察する要となっているのである。したがって、他者としての他者との関係はエロスにおいて明らかにされる。レヴィナスは女性的なものから他者の考察に着手しているのであり、エロスが対面関係に先行するのである。[8]このエロスの先行性は、女性的なものの対面関係への先行性である。ところが、『時間と他者』での「女性的なもの」と対面関係、『全体性』での「女性性」と対面関係とを比較すると、後者では、女性性は対面－対話関係から排除されるという仕方でその位置付けが変更されることになる。

つまり、『時間と他者』では、女性という性差を帯びた異他性を他者あるいは他性と措き、それを前提に、他者をめぐる議論を構築したと考えられるのであるが、『全体性』に到っては、その議論を対面－対話関係の他性と、以下で検討する女性性との二系に分けたと考えられるのである。ところで、著者であるレヴィナスは生物学的に男性である。それゆえ、女性的なものを異他性と措いたとも考えられるのであるが、この点については本論では問わない。というのも、「性 sexe」や「性差 différence de sexes」が様々な類や種といった論理的な分割ではないこと、また、矛盾でもなく、全体と部分の関係を形成するような相補的な二項の二元性でもないことが述べられており（TA.77-8）、「女性／男性」といった二項からなる性差の一対としてそれを導入したのではないことが明示されているからである。

三　『全体性と無限』――他者の享受

(一)　女性性をめぐる両義性

『全体性』における女性性は、「顔における他人の顕現を前提とし、かつその顕現を超越する次元」である「愛と繁殖性の次元」（TI.284）―正確には前者―で主に考察される。愛の次元に配される他者は、「愛されるもの l'Aimé」であり、かつ、「愛される女性 l'Aimée」と表現される。女性性は愛されることに見い出されるため、以下の課題は、存在者が他

者を「愛する」ことについての記述を解きほぐすことにある。

他者を愛することと、対面関係の他者と対話することとは他者との関係を単に二分することではない。「他人の現前が、この顔という現前と同時にその退却と不在において顕現する」(TI.166)。対話者としての他者が顔において現前する他性であるのに対し、「退却と不在」である「女性なるもの la Femme」は「慎みの本質そのもの」において現われる「卓越したもてなしに満ちた迎え入れをなす他者」である。『時間と他者』では、高低差がないという意味で否定的に指示された並列の関係が、『全体性』では女性性との関係を示すものとして「私-きみ」と表記される。そして、女性的他性との関係は「教えなき言語」、「沈黙の言語」であると明言される(*ibid.*)。

対面-対話の他者を前提とし、女性性として愛される他者は、その前提である他者を超え、新たな他者関係へと到る途上に位置している。[9] したがって、女性性もまた顔をなさないわけではないが、それはそれ自体が意味表出である他者の顔が具える意味作用の対極にある。愛される女性の顔は他者の顔から否定的に導かれる意味作用の欠如であり、「表出の拒否」、「対話の終わり」を表すのみである(TI.291)。

他者の他性が事物の他性とは異なる絶対的な他性であり、絶対的な外部性として出会われるのに対し、女性的なものは「内的な生が位置付けられる地平の基本的な方位の一つとして」(TI.169)出会われる。外部性が対面-対話関係を介して辿られる他者の他性との超越の関係であるのに対し、内面性は存在者の内的な生として、享受の展開において確立される。享受とは他者経験とは別に辿られる世界経験であり、前述の「食べる」の考察に連なっている。食物摂取をモデルとした享受は、事物の他性への「依存」と「独立」という相反する在り方で、一切の他なるものからの存在者の「分離」という在り方の達成へと向かう。このような享受が「存在の質料との究極の関係」(TI.140)であるのは、世界が享受の糧の総体であるのみならず、風景や環境のような存在者を取り巻く「要素」でもあるためである。世界とは、享受によって自我-自己関係をなす存在者の出来する場そのものであり、存在者にとっては居心地の悪い非人称の存在の場=il y aである。要素はil y aへと延長している(TI.151)。享受は、そういったil y aの恐怖からの脱出の方途であり(TI.208)、女性性との出会いは、このような局面に設けられているのである。

しかし、女性性は内在にのみ位置付けられるのではない。というのも、存在者にとって、他者の他性と女性性との出会いは同時に成立しており、愛は他者との関係をも超越するからである。「〈他人〉へと向かう超越である愛はわれわれを内在そのものの手前へ導く」(TI.284)。つまり、愛は他者へ

の超越でありつつ、他者の他性へと向かう欲望だけでなく、事物や世界の他性の享受を持続させ、その他性を存在者に内在化するための欲求をも介する関係を導くのである。「他人が他性を維持しつつ、欲求の対象として現われる可能性、さらには他人を享受する可能性、…欲求と欲望とのこの同時性…がエロス的なもの(l'érotique)を構成する」(TI.285)。他者の他性とは、存在者がそれを享受の糧として生きることのできないものであり、享受の対象ならざる他性、それゆえに絶対的な他性である。しかし、女性性において他者は享受される。

それでは、女性性の現われとその現われの場はいかなるものであるのか。「愛される女性の公現(épiphanie)は、柔和さの体制(*régime* de tendre)と一なるものでしかなく、柔和なものの様式(*manière* du tendre)は、極度の脆さ(fragilité extrême)、被可傷性(vulnérabilité)にある。柔和さの様式は存在するものと存在しないものとの境界に顕現する」(TI.286)。この境界を明らかにすると、存在するものの極限は、「剥き出しで〈意味作用のない〉厚み épaisseur〈non-signifiante〉et crue」、「法外な超質料性 ultramatérialité ex-orbitante」と表わされている(TI.286)。この存在するものの限界には、「非-存在の存在 essence de cette non-essence」として隠されたものである「〈未だ存在しないもの〉《ne-pas-être-encore》」が措かれており(TI.287)、一方の、存在しないものの極限には、「かつて存在し、もはや存在しないものだけでなく、未だ存在しないものが宿っている」(TI.289)。

様々な術語が繰り広げられる記述から導きうること。それは女性性の顕現が、存在するものと存在しないものとの境界で、未だ存在しないものに関わるということである。レヴィナスは様々な術語[10]を駆使することで、女性性の顕現する場を存在の境界として描き出す。質料や非人称の存在にまで迫るものではありながらも、それらからは区別されるものとして、女性性は示されているのである。それゆえ、女性性は存在者に比して、il y a や質料と極めて近しい。しかしながら、まさに女性性がもたらされることで存在者は非人称の存在と一線を画し、それへの解消を回避しうるのである。非人称の存在や質料ではなく、また、存在者や他者の存在や身体でもない他性としての女性性。それは、愛される他者を「柔和なものとしての肉」(TI.289)として享受するためにある。

(1) 愛　撫

「他人の他性を維持しつつ、他人を欲求の対象として享受する」というレヴィナスの議論においてそれ自体矛盾する関係を可能にするために、女性性は不可欠な媒介項である。と

いうのも、女性性とは、愛を契機として、超越と内在との双方に関わるからである。それは自我が「把持可能であると同時に接触不可能」(*ibid.*) な愛される女性を「愛撫する」ことによって果たされる。

「接触としての愛撫は感受性である。しかし、愛撫は感性的なものを超越する」(TI.288)。感性的なものは、享受の展開において、他なるものとして触れられ、把持されるものである。しかし、愛撫は感性的なものを超越する接触なき把持である。愛撫とは女性性へと向かう関係のようであるが、愛撫の目的は女性性そのものにではなく、女性性を超えることにある。女性性への接触の不可能はこのためである。一方の把持の可能についても、愛撫における把持はいわゆる事物を掴むこと、感性的なものの把持ではないため、その意味では「愛撫はなにものも把持しないこと」(*ibid.*)である。愛撫における把持があるとすれば、それは感性的なものを超える未だ存在しないものの把持であろう。レヴィナスが示す未だ存在しないものとは、存在者が主体的に可能事をいつか現実化させうるような未来にはない。さらに、存在者がその権能を最大限に用いて到達可能であるような未来は現在の延長でしかない。しかし、「未だない」とは、存在者の次元からは到達不可能な未来に存するなにごとかについての積極的な指標である。エロスにおける未来は、「絶対的な未来」であり、そこにおいて「自我は自らを逃れ、主体としての位置付けを失う」(TI.290)。したがって、この把持は能動的な権能ではなく、全き受動としての把持である。ここにおいて自我の自己との関係、自我の非-自我との関係は乱されるようになる(*ibid.*)。

感性的なものを超える愛撫、受動としての接触なき把持は、他者を受動的に感受する「同情 compatir」として示される。これはもはや、自らの生を楽しむ享受ではなく、他者の受動の感受であり、受苦でさえある(TI.290)。自我が他者の生の内容を感受する。他者を享受するとはこの意味においてである。糧となる他なるものの享受は他者を顧慮することなき孤独なエゴイズムであるが、他者の享受は自我と女性性との「感受するものと感受されるものの共通作用」(TI.297)によって形成される「二者のエゴイズム」(TI.298)である。この共通作用における「感受する」とは、受動の自我の作用であり、「感受される」とは、愛される他者としての女性性の受動作用である。さて、この共通作用には「感受するものと感受されるものの共通性」(TI.297) が存している。「他者は単に感受されるものではなく、感受されるもののうちで、感受するものが自らを確証する。それはあたかも、同じ感情が自我と他者とに実体的に共通であるかのようである」(*ibid.*)。この共通性は自我と他者とが同一の感情を感じることではなく、「感受することの同一性」(*ibid.*)である。つまり、他者は自我に

享受されるだけでなく、感受するものでもあり、また、自我はこの他者の感受する愛を感受するものである。

レヴィナスはさらに、未完である愛の増大として示す官能について、次のように記述する。「内密(intime)ではありながらも間主観的に構造化されている官能は、一なる意識にまで単純化されない。官能において、他者とは、自我であり、かつ、自我から分離されている」(TI.297)。レヴィナスにおいて、非対称を意味する「間主観的構造」をなすのは、自我と他者であり、二者を二者として維持することはレヴィナスの議論の要諦である。それゆえ、他者の享受は糧のそれと同等な自己同化ではなく、感受することの同一性を二者の合一と解することはできない。自我はもはや権能としてあるのではないが、存在者の人格ならびに実体の極点たる自我が解消されることはないのである。他者の享受は、自らの生を享受する自我が事物の他性を糧として存在者の自己に組み込む自己同化ではなく、反対に、存在者をそのような「自我の自己回帰」から解放する自己解体として機能する。非対称な関係にある自我と他者とは、相補的な関係でもない。他者が自我と同格のものではないように、エロスにおける女性性もまた自我と同格のものではない。しかし、女性性が見い出される前提であり、かつ、女性性との関係を経ることで超えられることになる他者が、自我の愛することを感受する者であるためには、〈同〉と非対称な〈他〉であるといえども、他者は〈同〉と同様の構造をなす存在者でなければならない。さもなければ、「感受することの同一性」は成立しないだろう。

(三) 女性化

存在者の愛は愛撫によって未だ存在しないものを求めるものであった。そして、愛に関係する女性性としての他者もまた自我と同様に「愛する」ことを展開するのであれば、女性性もまた、未だ存在しないものを求める。それゆえ、存在者と女性性との関係に、未だ存在しないものがもたらされない限り、両者による愛の関係が終息することはない。そのため、愛は「存在者の構造をなさないもの、無限に未来であるもの、産出するべきもの」(*ibid.*)へと向かう。ここで示される「存在者の構造をなさないもの」とは女性性を担う他者の謂ではなく、むしろ、未だ存在しないがゆえに存在者ではないものと解するべきであろう。女性性はこの未だ存在しないものへと向かうという目的とその成就のための媒介項なのである。

したがって、女性性は女性性そのものとして求められるものではない。自我が他者を享受することにおいて「エゴイストの極み」に達し、「最も残忍な享受」に充足するとは、他者を他性において遇することのない関係である。レヴィナスの議論—倫理的な他者論において、以上に検討してきたよう

な、他者をなにがしかの「ために」あるものとして位置付けることは困難であると考えられる。にもかかわらず、他者の他性との超越の関係を繋ぎ留め、さらには、内在にまで及ぶ他者との関係を確保するものとして、つまり、他性の迂回路として女性性が用いられていると考えられるのである。そのものとしてではなく、「ために」必要とされた他者について、レヴィナス自身が次のように記述する。「女性（féminin）としての他人との出会いが必要であるのは、可能事の彼方で、投企の彼方で、子どもの未来が生じるためである」（TI.299）。

それゆえ、未だ存在しないものへの関係は女性性なしには成立しえない。未だ存在しないものへ向けて女性性が超えられてゆく際に、先の感受することの同一性が重要になる。「私が充全に愛するのは他人が私を愛するときのみ」（TI.298）である。つまり、自我が他者を愛するときには、その他者もまた自我と同様に、自我を愛する者であることが必要なのである。それゆえ、その二者が二者のまま同一の感情を感受することが、愛することの充全さであると言えよう。この充全さが求められるのは、官能が「自己同一化の比類なき局面」「実体変化 *trans-substatiation*」としてあり、「同と他者とが子どもを産む」（*ibid.*）ためである。

エロスの展開である繁殖性に到って、自我と息子との関係において「全面的な超越、実体変化としての超越」が遂げられる場面では、女性性との関係で見られた「かのように」という留保が外される。そこに到って、官能において「実体的に共通であるかのように」感受される愛が、この子どもの産出における「実体」の変化を導くためのものであったことが明らかになるのである。女性性は、未だ存在しないもの―子どもを産出するためにあり、存在と非－存在の境界に設けられていたその現われの場は、存在するものと未だ存在しないものとを繋ぐ場として規定されていたのである。

愛から官能にかけての自己同一化は自我の自己回帰である。しかし、他者の享受は、自我の自己回帰からの解放、自己解体でもあるため、自我と女性性の「混合と同時に区別である二重性」（TI.302）によって養われる。受動の自我は「受容された愛の受動性によって自同性を保つ」（*ibid.*）と同時に、「自己自身の自己としてのみならず、他者の自己でもある」（TI.303）。愛における自我と女性性との関係をめぐる問題は、繁殖性に到っては自我と子どもとのそれへと展開する。自己解体でもある自己同一化の過程は、自我が別の自我の産出をなす回路を通して、産出される子どもの自我に付される。この自己同一化の変奏は、主体の再編過程であり、「主体の柔和化 attendrissement」、「主体の女性化 effémination」とされる。しかし、この柔和化、ないし女性化は自我が女性性を自己に組み込んだというわけではない。それは「ヒロイック

で男性的な自我（moi héroïque et viril）が〈真面目な事柄〉とはかけ離れたことの一つのように思い出すであろうこと」（*ibid.*）であり、受動としての自我が、男性性としての別の自我を産出するという事態に引き寄せて解されるべきであろう。

では、この女性化は女性性にとって、いかなる影響を有するのか。女性性との関係は、自我による子どもの産出以前にとどまるものであるため、女性性の記述は自我とその子どもとの関係を論じる繁殖性では見られなくなる。しかし、主体の女性化によって性差が解消されてしまったがゆえに、女性性が見い出せなくなる、つまり、女性性はもはや性差によって自我に対する異他性を示すことができなくなると解釈すべきではない。『全体性』の記述において、女性性は他性へと発展的に解消される異他性であるといえよう。しかしながら、レヴィナスによれば、他者との関係が成立する際にはつねに、「女性的なものの永遠に暴かれない処女性」（TI.288）や「女性性の処女性の不断の再開」（TI.289）が成立しており、愛から繁殖性の関係は不断に展開されているのであり、レヴィナスの議論において、女性性は解消されることのない異他性として構想されていたのである。したがって、他者の現われにはつねに、他者の他性と同時に女性性との関係が成立しているのである。

注

（1）Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini*(Martinus Nijhoff, 1961), KLEWER ACADEMIC, 1994. 本文中でそのページ数を示す際には、省略記号TIを用い、著書を示す場合には『全体性』と表記する。なお、引用における強調はいずれも筆者による。

（2）E.Lévinas, *De l'existence à l'existant*, J.VRIN (1963).1990. ページ数を示す際の省略記号はEE、本文中で著書を示す場合には『実存者』を用いる。

（3）もはや、本論で取り上げる問題の範囲を超えるものであるが、「繁殖性 la fécondité に到るエロス」という議論の道筋も『実存者』において既に認められる。『実存者』での繁殖性についての記述量も多くはない。しかし、繁殖性の議論は、むしろ、女性性やエロスの議論以上に明瞭に、『実存者』と『全体性』との共通性を見い出しうる。すなわち、繁殖性が「存在が他者として再開する瞬間そのもの」（EE.159）において設定されるものであり、「非対称的な間主体性は超越の場」で、「主体が主体としての構造を維持しつつ、不可避的に自分自身へと回帰しない可能性」、「息子を得る(avoir un fils)可能性」(EE.164)であるということ。さらに、『実存者』においては、繁殖性の成果として、レヴィナスが人間社会の関係として示す「兄弟関係 la fraternité」に身を置くためには、自我と他人との「異質性 l'hétérogénéité」がなければならず、また、その関係においては、単に原因や類ではない「父 le père」を公準とするということまでもが示されている。これらはまさに『全体性』で展開される議論である。

（4）E.Lévinas, *Le temps et l'autre*（Fata Morgana, 1979；PUF, 1983）7éd. 1998. 省略記号TA。一九四七年は、同著のもとになった講演を収めた*Le Choix-Le Monde-L'Existence*（Cahiers du Collège Philosophique）の公刊年。

（5）E.Lévinas, *Autrement qu'être, ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, 1978.

(6) 『時間と他者』の第二版において、新たに序文が付された、という事実は、港道隆（「顔の彼方?（上）」『思想』一九九六年三月号）の指摘による。

(7) 『全体性』において考察される対面－対話関係は、女性性の関与する局面ではない。

(8) このエロスと対面の前後関係、ないし、包含関係は『全体性』での議論では逆転する。

(9) 女性性および他者を超える「新たな他者関係」とは、繁殖性の概念をもとに論じられる、父－子関係と兄弟関係のことである。本論注（3）参照のこと。

(10) レヴィナスの採用する術語・造語について、「レヴィナスの苦労は、感性の言語を開発することにある」（港道隆、前掲論文）という指摘がなされている。Chalier はその術語・造語を全くのアナロジーであるとする（CHALIER C., *Figures du féminin. Lecture d'Emmanuel Lévinas*, Paris, La nuit surveillée, 1982）。Kayser は、レヴィナスにとっては、他者との関係が時間であるから、意識や表象を超える時間を記述する言葉を見い出そうとしていると指摘する（KAYSER P., *Emmanuel Levinas : la trace du féminin*, Paris, PUF, 2000）。

（にしだみつほ　哲学哲学史・博士後期課程）